

大岡昇平

新潮社



女性と文学の誕生

大岡昇平

新潮社

女性と文学の誕生

じよせい ぶんがく たんじよう
女性と文学の誕生

著 者 大岡昇平（おおおかしょうへい）

昭和五十七年九月十日印刷

昭和五十七年九月十五日発行

発行者 佐藤亮一

印刷所 大日本印刷株式会社 製本所 株式会社大進堂

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電 話 業務〇三(266)五一一一 編集〇三(266)五四一一

定 価 一二〇〇円 振替 東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

女性と文学の誕生／目次

I

水・椿・オフィーリア——『草枕』をめぐる——

トリスタンとイゾーの駈落ち——『三四郎』をめぐる——

母と妹と犯し——文学の発生についての試論——

エトルリアの謎

II

下北沢の思い出

横光先生の初期作品

昔ばなし

兵本善矩の小説

「知ってるよ」

難問の季節

ゴルフの思い出

148 142 137 133 130 125 121

98 69 37 9

預けられた仕事

『ひとびとの足音』を聴く

III

大正のスタンダール

エゴイストたち——スタンダールの場合——

野川隆のこと

記憶と忘却との間——「白痴群」第六号騒動記——

野とコボルト——中原中也詩解釈との関連において、
ヴェルレーヌ訳詩へのささやかな貢献——

『復活』と「瀧の白糸」

ハムレット余聞

差別としての心不全

後記

初出誌一覧

246 245

女性と文学の誕生

I

水・椿・オフィーリア——『草枕』をめぐる——

一

『草枕』は明治三十九年「新小説」九月号に、今日の言葉でいえば、「一挙掲載」の形で発表された中篇で、漱石の作家としての地位を確立した重要な作品です。『吾輩は猫である』（明治三十八年一月—三十九年八月）を書き終ったところでした。それまでに『坊っちゃん』（明治三十九年四月）を書き、大衆的人気を得ていたのですが、それはいわばユーモアがあり、また衛学的な作家としてのそれでした。漱石としてはその間に断続して発表した学者的でまたロマンチックでもある短篇『薙露行』など、この年『漾虚集』（明治三十九年五月）にまとめられた作品を大事にしていたらしいのです。しかしそれらは彼自身の思っているほどすぐれたものではなく、読者の反応もあまりなかった。ところが『草枕』はこの二つの方向を綜合した作品といえます。豊かな学識と詩情に支えられて、人生全体にかかわる哲学小説らしくもあり、画家である「余」と那美さんというヒロインとの恋物語のようでもある。作品の中で、小説一般の読み方として示されているように、「どこから読み始めてどこで中断しても面白い」小説で、美文家としての漱石の特色を十分に発

揮した作品でした。

山の中の温泉場の娘である那美さんは結婚歴のある女性で、当時は「出戻り」として蔑視されたのですが、彼女はそんなことは全然気にかけていない。その自由な挑発的な態度は、当時の新しい女性のタイプを描き出したとされたようです。一方、山や海の自然描写もすぐれていて、私の中学生の頃、というと五十年以上前ですが、中学二年ぐらいの教科書に、冒頭の峠の茶屋の場面が入っていました。「おい」と声を掛けたが返事がない」という句をいまでも憶えているくらいです。

『草枕』が熊本附近の小天温泉あまのを舞台としていることは、よく知られています。漱石は明治二十九年から三十三年に外遊するまで、熊本五高で教えていたので、その間に行った経験をもとにして書かれた、といわれています。小天には志保田旅館に当る宿屋もあり、那美さんのモデルという女性がいて、新聞種になったことがあるそうですが、八十年前の新しい女のモデルせんさくはみなさんはあまり興味はないでしょうし、私も同じです。

漱石の作品で今日若い方に一番読まれているのは『坊っちゃん』でしょうが、次は『三四郎』だろうと思います。しかし『草枕』には漢詩、英詩、俳句などがやたらに出て来ますし、文語脈の文体は読みにくいから、あまり読まれていないでしょう。もともと陶淵明の「菊を東籬の下に採り悠然として南山を見る」という漢詩が引かれているのは、ご存じかも知れません。この詩句は漱石の『草枕』のせいで有名になったといってもいいくらいなもので、今日では「東籬」という割烹旅館があります。「籬」とは生垣のことです。

明治三十九年は日露戦争後の不安な社会状況——賠償金が取れず外債ばかり残ったのです——を反映して、フランス仕込みの人生の醜惡な面をおそれずに描くという自然主義が盛んでした。

それへの反措定として俳句的な「低徊趣味」とか「余裕のある小説」といわれた。全体としてその規定でいいのですが、この作品に続いて書かれた「二百十日」「野分」は激しい社会批判を示していて、それが『草枕』にも底流している、とも見られます。そのあと『虞美人草』（明治四〇年）、『三四郎』（明治四一年）と書かれるので、それらの順序と関連を解きほぐして行こうと思っています。

小天温泉は熊本市の西北方の海に臨んだ山の中にあつて、熊本からは、徒歩で峠を一つ越して行つたらしい。一方その山地から一筋の川が流れ出し、熊本市の西側を通つて海に注いでいる。『草枕』のおわりの方でこの川を舟で下る描写があります。もつとも漱石はこういう地形をあまり忠実になぞっていないのですけれど、この川下りはあとで述べることに關係するので覚えておいて下さい。

「山路を登りながら、かう考へた。

智に働けば角が立つ。情に棹^{さへ}させば流される。意地を通せば窮屈^{とくかく}だ。兎角^{とかく}に人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れて、画が出来る」

この有名な書き出しは、いまの教科書に採用されているかどうか知りませんが、『草枕』はこういう風に、「余」という画家が、一週間ばかりの保養に温泉へ行く、その間に見たこと、考えたことを漫然と記すという形になっています。しかしこの書き出しの処世哲学、芸術論は平明簡潔で、今日なら芸術は遊びである、といったところでしよう。絵画論、人世哲学はもう少し詳しく述べられ、行く手に見える禿山の、「側面は巨人の斧で削り去つたか、鋭どき平面をやけに谷

の底へ埋めて居る。」といった自然描写もあります。海の見える温泉地の環境の描写も巧みです。その娘の那美さんとの間に「非人情」という、これも有名な規定——「不人情」でなくて「非人情」、つまり人情にからまれて、恋愛を含めて、人生の深刻な事情には囚われない、という一種の審美的な超越的立場が強調される。二人は恋愛してるんだか、してないんだかわからない、その心理と理屈のへんな交錯が、この作品の魅力です。自然主義の当時流行の天外、風葉などの濃厚な性愛描写より安心して読めるし、その頃はまだ読者のうちにあった文人趣味に訴えるところもあつたらしいのです。私の世代でも注釈がないと読めませんが、『草枕』ののつた「新小説」は十日で売り切れ、単行本は百版を重ねるベストセラーになりました。

時は春、山道を登るうちに雨が降つて来て、峠の茶屋でひと休みしていると、馬子が馬を曳いて通りかかる。この馬子は以前那美さんが熊本へお嫁入りする時、花嫁衣装を着た彼女を馬に乗せて、この峠を越したことがあつた。桜の下に駒を止めたなら、散る花が降りかかった。少し紋切型ですが、絵のような光景を語ります。「余」はその島田鬻の中にミレーの描いたオフィーリアをはめてみたら、びったり合つたという、かなり突飛な空想です。

オフィーリアは申すまでもなく、シェイクスピアの『ハムレット』の許嫁で、ハムレットにすてられ、父を殺され、気が狂つて、川へ身を投げたか、偶然落ちたか、とにかく死んでしまふ。(當時はオフィーリアではなく、「オフエリア」と書かれています。現在の呼称に統一します) 峠の茶屋のお婆さんは長良の乙女の伝説の話をします。これは万葉集巻八にある葦屋処女の語り替えて、男二人に恋されて、どっちについていいかわからず、池に身を投げて死んだ、という日本全国、多分世界中いたるところに見出される説話です。「あきづけばをばなが上に置く露のけぬべくもわはおもほゆるかも」これは同じ万葉集でも巻八にある「日置長枝娘女」の歌で、漱石は

こういう文獻的な歌や伝説をちりばめて、読者の美的な趣味に訴える、それも文学の働きと想っているわけです。

那美さんが熊本へ嫁入りした時に、他にも候補者があったことが、あとで明らかにされる。それは彼女が京都へ留学中——当時関西にあった女学校、高校に当るものは京都がはじめです——知った、多分京大の学生、それと熊本の銀行社員ですが、結局、地元の強味と金が勝って、熊本へとつくけれど、銀行がつぶれると、五年で実家へ帰って来てしまったのです。那美さんは二人の男に求婚されても、自分は身投げなどしない、二人とも男妾にするだけだなんていう。一方、自分が身投げしたくて楽々と死んでいるところを描いてくれ、ともいう。まだ見ぬ先からミレーの「オフィーリア」を思い浮べるのはその伏線ですが、少し不自然です。その不自然なところ、漱石がむりをしているところが、私には興味があるのです。

ミレーといっても「晩鐘」や「落穂拾」のフランスのジャン・フランソア・ミレー *Miller* ではなく、イギリスのジョン・エブレット・ミレー *Millais* です。十九世紀後半のラファエル前派に属する画家で、イギリスの画壇もその後マネ、セザンヌ、ゴッホなどフランスの印象派に押されて、これらヴィクトリア朝の画家は忘れられていきましたが、当時はニューウェイブだったのです。ミレーのほかにホルマン・ハント、マドックス・ブラウン、D・G・ロセッティ、ウィリアム・モリス、バーン・ジョーンズなどが同じ派の代表に数えられますが、一八五五年にパリの国際美術展へ展覧された時は大変な評判でした。

ラファエル前派というのは、ラファエル以前、つまりラファエルを代表とするイタリア・ルネッサンス以来の理想美をすて、中世の技法と題材に戻るべきである、という主張です。ロマンチックであると同時にリアリスチック——題材は中世の伝説など取って物語的にする一方に、人物

の姿体や樹木、岩などをありのまま描くという意味でリアリスチックで、外光の中で描けと主張しました。文学を含めて大抵の芸術上の流派の主張は、こんな風に色々な相反する要素を含んでいます。とにかくヨーロッパの美術界のトピックスでした。従って日本でも明治二十年代の「文学界」一派や、上田敏などロマン派と結び付いて大正年間まで影響力を持っていました。絵の方では青木繁への影響が有名ですが、ラファエル前派は最近青木と共にリバイバルの気味があつて、美術雑誌が特集したりしています。

ラファエル前派は漱石がロンドンへ行った頃には、世紀末の唯美主義、美人画になっていましたが、さつきいったように、ロマンチックな題材ばかり書いたのではない。一八四八年以来の民主主義運動と結び付いて、時局的な題材、地方の製鉄作業場とか、表向きは繁栄するイギリス社会からはじき出されて行く移民の悲しみとかを描いた。フランスの印象派以前に、アトリエの外へ出て、外光の中で描くべきだともいいました。一八五五年のバリの展覧会に出たハントの「わがイギリス海岸」で、白い羊に青や赤の影をつけたのが劃期的なことでした（当時、影は黒か褐色で描かれていましたから）。いまリバイバルになっているのは、この流派が最初の活力を失つて、ロセッティ、バーン・ジョーンズなど世紀末的唯美的、逃避的になってからの作品の方で、一九六〇年代末からの一般の装飾的傾向のためです。

ミレーはこの派のほかの画家と比べて段違いに絵がうまい職人として、すぐ王立芸術院会員となり、肖像画家となつて一派から離れますが、「オフィーリア」は一八五一年の初期作品です。外光の中ではなく、アトリエの中で描かれた。画面は暗く、岸辺の樹や草の緑が主調で、オフィーリアの顔と、水面にひろがった衣装、岸辺の花などが赤、紫、白で色取りをつけている。モデルになったのは、シダルというあとでロセッティの奥さんになった婦人帽子屋の売り子で、寸の